

ベティ・マクドナルドの生き方

暮らしと私

猪熊葉子訳



著者について

ベティ・マクドナルド

一九〇八年、アメリカコロラド州生まれ。シアトルに育ち、ワシントン大学を中退。十八歳で結婚し、夫とともに僻地で農場生活をおくる。その後離婚して実家にもどり、大恐慌下のシアトルで苦勞して職を得るが、やがて結核にかかりサナトリウムで療養生活をおくる。三十五歳のときに再婚、一家四人でシアトル対岸のヴァンシオン島で暮らす。一九四五年に『卵と私』を刊行、無名の主婦から、一躍四〇年代アメリカのベストセラー作家となる。自らの生活体験を綴った四部作は、広くアメリカ女性たちに読みつかれている。一九五八年歿。

訳者について

猪熊葉子（いのくま・ようこ）

一九二八年千葉県生まれ。児童文学研究家。翻訳家。現在、聖心女子大学教授。

著書『英米児童文学史』（共著）ほか。

訳書『マクドナルド『仕事と私』、サトクリフ『もしびをかかげて』、エイキン『子どもの本の書き方』ほか多数。

ベティ・マクドナルドの生き方
暮らしと私^{わたくし}

一九八九年四月二〇日発行

著者 ベティ・マクドナルド

訳者 猪熊葉子

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一・一二

電話東京二五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六一六二七九九

堀内印刷・美行製本

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作権者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ベティ・マクドナルドの生き方

暮らしと私

猪熊葉子訳



(本体2233円)

74-8 C0397 P2300E

ベティ・マクドナルドの生き方

暮らしと私

猪熊葉子訳



晶文社

Betty MacDonald :

ONIONS IN THE STEW

Original Copyright © 1954

by Betty MacDonald

Published in Japan, 1989

by Shobun-sha Publisher, Tokyo.

Japanese translation rights arranged with

Brandt & Brandt literary Agents Inc., New York

through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo.

暮らしと私
目次

1	新家庭——金もなければ、家具もない	
2	家探しは自分の足で	28
3	ガラクタがついで海を渡る	52
4	島暮らしをはじめてみたら	65
5	神さまのきまぐれ	90
6	自給自足のよろこび	117
7	園芸趣味もほどほどに	142
8	人のものに手を出さないで！	165
9	動物たちとおつきあい	189

10 修理屋を呼べ！ 211

11 桃もぎのアルバイト 241

12 社交上手は料理上手 272

13 少しはのんびりしたらどうなの、ベティ？ 295

14 電話のベルがおそろしい 309

15 年ごろの娘の扱いかた 342

16 思春期の嵐もようやくすぎて 381

訳者あとがき 405

ブックデザイン 平野甲賀

専らしと私

I
新家庭——金もなければ、家具もない

この十二年間わがマクドナルド一家はビュージェット湾のある島に住んでいる。この暮らしからは逃れようがないのである。島の暮らしは町のホテル住まいとは違うけれども、慣れることはできるし、それが好ましいものと思えてくることさえも、ありえないことではない。もつとも以前は湾をへだててほんの鼻の先に見える大きな気持のいい暖かな町の灯火を憧れのまなざしで眺めながら、「セ・ラ・ゲール」（戦争だから仕方ないさ）といいあったものだった。でもいまとなつては、十一月（あるいは七月）が家の回りを濡れたスポンジのように取り巻くころになると、わたしたちは満ちたりた思いで互いにこういいあうのである。

「あたしはここが好きよ。ほかのどこに行く気もないわ」

誰もがわたしたちのような暮らしをするべきだとはいえない。しかし、あなただつてつぎのうな点に直面する勇気があるなら、結構幸せな島暮らしができるのではないかと思う。

1 夕食に招いたはずの客が、気がつくと七日間、さらに何週間も、あるいは何ヵ月も滞在していて、芝生のぶらんこで寝ているのをおもしろいと思えること。（わたしはいつも夫のダンにそうだったものだ）——それには睡眠薬を二錠は飲む必要があるが。それにアライグマは友だちを求めてやってくるのだということを覚えておくことである。

2 どうしても外すことのできない用事、例えば出産とか、裁判所に陪審員として出廷しなければならぬというときには、フェリーが自動的に欠航するのを承知しておくこと。

3 島に不動産をみつけることはさほど難しくはないこと。特に、ここ北西部では土地ばかりか人間でさえもが水びたしになっているのであるから。だが購入の資金ぐりとなると話は別である。銀行員というものは都会の住人であって、何によらず、目に見えないものは「遠すぎます」といって片づけるくせがある。

4 親戚の者から「もしもし、このごろあなたのとこじゃどうしてるかしら、って話しあっているんだけどね」という挨拶ではじまる電話がかかってきたら、それは誰かの子どもたちを近く預かるはめになる知らせであると覚悟すること。

5 食事をする者の数がふいに増えたとしても、麺類を足せばなんとかなえるということ。

6 もしフェリーの最終便を逃してしまったら——それは午前一時五分なのだが——翌朝まで棧橋にすわっていなくてはならないこと。しかしそのうちこのように大量の水にはばまれて島に

居すわっていなければならなかったことを感謝するようになるのである。島では何時間駐車しようとも、町とは違って違反切符を切られないからである。

7 島暮らしをしてみようかともくろんでいる人は肉体的には健康でなければならず、それに加えて、頭のほうは少々お粗末というのならさらに結構であること。

わたしたちの住んでいる島は一七九二年にバンクーバー船長によって発見され、その友人のジエイムズ・ヴァシヨンの名にちなんでヴァシヨン島と命名されたのだった。島としては中くらいの大きさで、肩からふくらはぎまでは約二四キロ、腰回りは八キロというところである。島は緑、それも刻みバセリの鮮やかな緑であり、そのふっくらして曲線の多い体をピュージェット海峡の凍るように冷たい水にまかせてやすらっている。島はシアトル市とタコマ市との間に南北にのびており、その二つの市とはフェリーで行き来ができる。

地図で見ると、ヴァシヨン島は孔雀のように見えるが、禿げタカに見えないこともない。そのどちらに見えるかは、どっちの端を頭に見立てるかによって、またこの島にどのくらい長く幽閉されていたかその期間によって決まるのである。気候はシアトルよりも十度は暖かく、湿度も高い。この付近は桜草、アカスグリ、石楠花、苺、白薔、読書好きで乾燥肌の人に向いた土地である。人口は約五千、その人びとのほかに、冬になるとめそめそして町に逃げ帰る臆病者が無数にいる。

島はその位置と、水際から急にそそりたつ台地のせいで、景觀に恵まれている。西方には峨々たるオリンピックの山々が雪を頂いており、人の手の入らない素晴らしい自然の残っているオリンピック半島には黒々とした原始林が野生の動物や魚を生息させ、湖や川によって潤い、野生の息吹きを感じさせている。ヴァシヨン島とオリンピック山、半島とを隔てているのはビュージェット湾の細長い曲りくねった美しい西水道である。東には紫に煙るカスケード山脈と、シアトル市が見える。北にはペインブリッジ、ブレイク、ウィッドベイなどの島々と、オリンピックの山々とは臨まれる。南にはレーニア山があるのだが、この素晴らしい山は信じられないほどのほのかみやであって、ミネアポリスからジムおじさんとヘレンおばさんが本当に帰ってくることを確かめない限り、雲を払ってその美しい顔を見せることはないのである。レーニア山は標高四四〇〇メートル、富士山よりは高いが、エヴェレストの半分の高さである。百科事典によれば、この山には二六の水河があるそうだが、これはなかなかのものだといってよい。これを発見したのはこのあたりを長い時間かけて航海してまわり、いろいろなことを見つけたあのバンクーバー船長であった。非常に朝早くか、まれには夏の夕方に山麓が現われるほかは、レーニア山は水平線の上に見え隠れして（たいていは「隠れ」のほうである）雲のなかに浮かぶ蜃気楼のように見える。この地方では、この山を「お皿にもったアイスクリームのようだ」といいならわしている。それが苺アイスクリームに見えるか、バナナアイスクリームに見えるかは一日の時間によって異なる。もっと正確に表現するなら、このアイスクリームにはうす青いソースがかかっている

というべきだろう。

ヴァンション島では何によらず成長がめざましい。棧橋から島の中心の道路を辿りはじめた人は、これでは土地者の案内人を雇ってくるか、少なくとも山刀を持つてくるべきだったと後悔するに違いない。ハンノキ、ウツギ、楓、ニワトコ、イチゴノキ、松、サーモンベリー、柳、月桂樹、樺、花水木、カラスウリなどが道路の縁にひしめきあい、それを緑のトンネルに変えようとしているのだが、郡の道路管理係、電話会社と電力会社が始終枝を払い、草刈りに務めているので、道路は辛うじてジャングルと化すことを免れているのである。

海のほうから見ると、ヴァンション島は濃い緑のアフガン編みの毛布をかけて日曜日の昼寝をしている太った紳士のように見える。ありあわせの濃淡とりまぜの糸でこしらえたアフガン編みのその毛布はひと目で手製とわかるのだが、縁に房がついており、それが所々でこぶになってはいくものの、大きさだけはたっぷりしていて、いくつもの深いひだが水面に垂れているのである。この広大な緑を背景にすると、海岸沿いに散らばっている家々は小さく、さびしげに見える。まるでそれは潮にのって流れてくるゴミの紙箱のような感じである。丘の斜面にあるわずかばかりの家々のほうは、巨大な羽布団のなかに埋もれて窒息しそうなびていて弱々しい病人のように見える。

ヴァンション島はさまざまな農産物で知られている。赤スグリ、パイ用のサクランボ、梨、苺、セイヨウスグリ、ボイゼンベリー、ローガンベリー、木苺、鶏、卵、山羊の乳、クロフト百合に